さかまた

2007.7
NO.69

カマイルカ「キララ」の成長

▲一歳になった「キララ」（手前）と母親「スピカ」（後）

当館で初めて生まれたカマイルカの「キララ」が、5月3日に1歳になりました。「キララ」が無事、誕生日をむかえることができ、係員の喜びもひとしおです。

「キララ」はまだエサを食べていない生後5ヶ月の時に体調をくずし、ヤセも見られたので、口の中に魚を入れて強制的に飲みこませる「さし餌」を始めました。さし餌のためには、「キララ」が動けないように保定をする必要があり、そこで活躍したのが、「可動式床」を備えたプールでした。可動式床とは、水を落とさずにプール底がせり上がり、40㎝から3.5mまで、自由に水深を調整することができる装置で、イルカに負担をかけずにさし餌などの処置を行え、作業が終了すればすぐに水位をもどすことができます。

バンドウイルカは、通常、生後6～7ヶ月でエサを食べ始めるので、「キララ」もそのころに、自然にエサを食べるものと思っていましたが、「餌付け」が完了し自分でエサを食べるようになるまでには、今までに経験したことのない苦労をすることになりました。子育ては母親「スピカ」にとっても係員にとっても、初めての経験。「スピカ」とともに「キララ」の成長に一喜一憂した1年を、飼育日誌を通してご紹介します。

●当館初！カマイルカの出産に成功！

2005年

5月28日 「ホクト」と「スピカ」の交尾を確認。

2006年

1月18日 出産準備のため、「スピカ」を「可動式床」と水中観察窓を備えたプールに移動。仲間を入れずに、「スピカ」1頭で出産させることにする。

5月 3日(0日齢) 16時39分破水。16時59分尾ビレ出現。18時45分出産！！すぐに呼吸。壁にぶつかり、吻と右目の前にスリ傷。

5月 4日(1) 16時54分初授乳。2秒間と短いが乳汁を確認。方向転換時、壁にぶつかり、約10秒間静止。目が離せない状態が続く。

5月 9日(6) 「スピカ」の前を泳ぐことが見られる。遊泳が安定してきたようだ。

7月13日(71) 「スピカ」と一緒に、「ナンチャッテ・初ジャンプ！！」･･･でも、着水に失敗、腹を打つ。痛そう。

8月16日(105) 腹上で静止したり、尾ビレを振ったりとよく遊ぶ。

8月25日(114) 愛称が「キララ」に決定！！輝く星のように･･･と願いをこめて。

●「餌付け」開始

9月 6日(126) 生後4ヶ月。そろそろエサに興味を示す時期なので、試しにシシャモを投げてみるが、無関心。

9月24日(144) 元気を欠き、ヤセも見られる。係員とのコンタクトを強めるため、ダイバーが水中に入るが、警戒して寄ってこない。

9月25日(145) 体表が荒れて汚い。アワ混じりの排便やガスを多く確認。

9月29日(149) さらにヤセて元気がない。授乳は順調だが、栄養が不足している可能性があり、可動式床を水深40㎝まで上げ、犬用ミルクと魚のすり身を強制的に与える。

9月30日(150) 「さし餌」を行い、体重の変化を見る方針に変更。水深を60㎝にして、さし餌を開始。

10月 2日(152) さし餌の効果か、太りが見られる。危機を脱したと少しホッとする。元気な遊泳やジャンプも見られる。

▲保定して口の中にエサを入れる（160日齢ごろ）

10月10日(160) エサをのどまで入れると、少しずつ舌を動かすようになる。自分で飲みこもうとしているようだ。

10月11日(161)～15日(165) 1日おきにエサのカスを嘔吐する。エサが多いのか？行動の下降は見られないので、給餌量を調整する。

10月31日(181) さし餌の時間とわかっている様子で、係員が近づくと、「つかまえて」というように静止して待っている。背ビレをつかむだけで、保定ができるようになった。さし餌の飲みこみもスムーズになる。

11月12日 (193) エサを見せるとくわえて自分で飲みこむ。自力摂餌開始！！

12月22日(233) つかまえられるのをじっと待ち、背ビレをタッチした後でエサをさしだすと、自力で食べるようになった。

▲係員に寄ってきてエサをもらう（250日齢ごろ）
「キララ」にはトレーナーの胴長がエサの時間の目印？

2007年

1月10日(252) 保定をせずに手から摂餌することは学習できたので、水深と係員の位置の問題。試しに水深80cmにしたところ、静止せずにエサをくわえて、泳ぎながら飲みこんだ。

1月11日(253) 水深を60㎝にして、ステージからの給餌を試みるが、摂餌しない。係員がプールに入らないとダメなのか？

1月12日(254) 試行錯誤の毎日。今日は、水深80㎝でまず給餌をして、その後すぐに係員がステージに上がって、エサをさしだすと摂餌した。水深を1ｍにして、同じ方法を試みたが、今度は摂餌しない。

1月14日(256) 係員がプールに入らなくても、ステージから摂餌する。ただし、飲みこみが悪いので、給餌量がのびない。原点にもどって、水深60㎝で保定をしながら給餌をする。一歩進んで二歩下がっているようだ。

1月25日(267) 水深60㎝のプールに係員が入り給餌をした後に、ステージに上がって給餌を試みる。ステージに上がる時に、水を入れた胴長を水中に入れ、まるで係員が水中にいるかのように見せて、ステージから手をのばし給餌したところ、まんまと成功！！係員の足が水中にあることに、条件付いているのかもしれない。

1月27日(269) 同じ方法で、今度は少しずつ水深を深くしていったところ、可動式床を上げずに水深3.5mでステージから給餌することができた。

2月15日(288) 昼の給餌、元気がなく接近しない。

2月16日(289) 採血、胃液採取、筋注処置。血液検査上大きな問題なし。

2月20日(293) 他個体のように、給餌時の行動や摂餌状態の微妙な変化から、食欲の強弱や体調の異常を判断するのが難しい。今日は口開けが悪かったので、給餌をやめた。

2月21日 (294)～26日(299) 1日に1～2回の嘔吐を確認する。行動は良好であるが摂餌状態も悪いので、水深を60cmにして給餌をしたところ、摂餌状態は好転した。

3月18日(319) 可動式床を上げずに水深3.5mで、ステージに接近しスムーズに摂餌するようになる。嘔吐も見られない。水面より顔を出して摂餌するトレーニングを開始。

●がんばれ!!「キララ」

4月 6日(338) 他個体にならすことを目的に、隣のプールからバンドウイルカの「スリム」を移動。「スリム」はこれまでに8頭の子供を育てたベテランママで、リーダー的存在。「キララ」は物おじせずに、母親以外で初めて出会う「スリム」に接近。その瞬間、やっぱりやられた。体側に軽い咬傷を受ける。イルカ社会の1年生は学ぶことが多い。

4月12日(344) ハセイルカの「カペラ」と対面。「スリム」でこりたのか、安易には近づかない。

4月27日(359) 基本トレーニング開始。

5月 3日(365) 1歳の誕生日。元気イッパイ。これから一緒に暮らすイルカたちに負けないように、投げたエサを食べるトレーニング開始。

▲顔をあげてエサをもらう「キララ」（手前）と母親「スピカ」（後）（1歳）

▲誕生日の身体測定（体長142㎝，体重48kg）

「キララ」は現在、「スピカ」からの授乳も続いていますが、水面から顔を出し、1日に約4kgのエサを食べるようになりました。プールに投げたエサも食べるようになり、ときおり高いジャンプを見せ、プールから飛び出すのではないかと係員を心配させます。ガラス面に遊びに来ては、お客様に愛嬌をふりまき、アイドルの素質を感じさせています。

国内ではこれまでに6頭のカマイルカが生まれていますが、無事に大きく育った例はなく、まだまだ気は抜けません。これから光り輝くスーパースターをめざして、大切に育てていきたいと思います。　　（加藤　加奈）

トピックス

オットセイの「しんちゃん」海へ帰る

▲放流直後の「しんちゃん」

保護していたキタオットセイの放流を3月8日に実施しました。

このオットセイは、昨年9月に埼玉県の川越市で発見され、テレビや新聞で広く紹介されて有名になったオスの子どものキタオットセイ「しんちゃん」です。川越の新河岸川に姿を現した翌日に保護され、上野動物園で治療を受けたところ、すっかり元気になり、保護から3ヶ月が過ぎた昨年12月、放流の準備のために鴨川シーワールドへ移されました。キタオットセイは冬から春先にかけて、北の海から常磐沖や銚子沖にかけて回遊してくることが知られており、北へもどる時期にあわせて群れにもどそうという計画です。

▲保護され上野動物園へ到着（東京都恩賜上野動物園提供）

放流を目的とした「しんちゃん」の飼育には必要以上に人間にならさない注意と、生きているエサをつかまえて食べる訓練が必要でした。「しんちゃん」は、生きた魚を忘れてしまったのか、泳ぎ回る魚に興味を示さず、逆に驚いてプールから飛び出てしまう始末で、安定して生きた魚を食べ始めたのは放流の2週間前でした。

放流当日、陸路で銚子まで運ばれ、船に乗せられた「しんちゃん」は銚子沖約17kmの地点で海へと放されました。「しんちゃん」は、船のまわりを気持ちよさそうに泳ぎ、まるで私たちとの別れをおしむかのようにその場を去ろうとはしませんでした。後ろ髪を引かれる思いで港へ向けて船を走らせると、すぐに「しんちゃん」の姿は確認できなくなりました。

最後まで私たちを心配させた「しんちゃん」、無事に仲間と合流して北の海へもどってくれたものと信じています。

▲鴨川に到着した「しんちゃん」

▲久しぶりの大海原で気持ちよくジャンプ!!

（今井　健介）

「メダカの小川」の一年

▲順調に育った稲は、9月に黄金色の稲穂をつけた

かつて、田んぼのまわりにある小川（用水路）では、群れで泳ぐメダカの姿をよく見かけることができました。私たちに最もなじみの深い淡水魚であったメダカは、近年急激に数が減少し絶滅が心配されています。鴨川シーワールドでは、昨年の3月より、メダカの住む田園風景の一部を再現した展示施設「メダカの小川」に取り組んでいます。この施設に作った田んぼや小川で、メダカやオタマジャクシ、タニシなどを展示し、そのまわりに、タンポポやセリなどの植物を植えました。

初めに200尾ほどのメダカを放しましたが、初夏の水温の上昇と共に水草などに産卵し、夏にはふ化した体長5mmほどの子どもが数多く見られました。子どもは順調に育ち、無事冬もこし、田んぼや小川を群れになって泳ぎまわり、まさしく「メダカの学校」といったところです。メダカの他にもタナゴやドジョウ、タニシなども無事に繁殖し、その子どもたちが元気に育っています。

▲群れになって泳ぐメダカ

昨年の春、鴨川市内の山間の田んぼで採集したヤマアカガエルの卵は、夏にはオタマジャクシから親ガエルになりました。その後は田んぼの畔（あぜ）や茂みで過ごしていましたが、今年の1月には田んぼでの産卵を確認しました。その卵から数多くのオタマジャクシが誕生しました。

▲冬にふ化したヤマアカガエルの子ども（オタマジャクシ）

田んぼは5㎡ほどの小さなスペースでしたが、春にもち米の苗を植えたところ、台風や潮風などの被害もなく順調に成長し、秋には黄金色の稲穂をつけ、約一升（1.6kg）のもち米を収穫しました。このもち米を「鏡餅」にして正月に展示した後、かき餅をつくり、動物友の会のみんなでおいしく食べることもできました。

▲「不耕起栽培」による田植え

今年は新たな試みとして、稲を刈った後の田んぼを耕さずに肥料も使用しない農法である「不耕起栽培」に取り組み、4月に田植えを行いました。

お客様のメダカの小川への関心は非常に高く、中高年のお客様からは「懐かしい」「昔はどこにでもいたのに」などの声や、親子連れの方からは童謡を口ずさむ声も聞こえてきます。

（齋藤　純康）

モラモラ

子シャチの「ラン」満1歳

2月25日、子シャチの「ラン」が、満1歳の誕生日を迎えました。生まれた時は、体長2m、体重180kgほどでしたが、今では体長3.1m、体重およそ530kgにまで成長し、黄色だった模様はだいぶ白くなりました。授乳はまだ続いていますが、エサの魚も毎日10kgほど食べるようになり、すくすくと育っています。母親「ステラ」の色々な動作のマネをしたり、「ステラ」の食事の邪魔をしてしかられるなど、とてもおてんばです。また、簡単な動作も覚え始め、中でもジャンプが得意です。「ステラ」に負けずにジャンプする姿は、元気いっぱいです。パフォーマンスにデビューする日が楽しみです。

（刈込　香苗）

トウアカクマノミの繁殖に成功！

鴨川シーワールドでは、イソギンチャクと共生することで有名な、クマノミ類の繁殖に取り組んでおり、これまでにハマクマノミ（日本初）、カクレクマノミ、クマノミの繁殖に成功していますが、9月に当館では初めてのトウアカクマノミの繁殖に成功しました。トウアカクマノミはサンゴ礁に住む体長15㎝ほどになる種類ですが、他種に比べ臆病な性質のため水族館での繁殖例が少ない種類です。ふ化直後体長4～5㎜ほどだった稚魚は、1ヶ月後には体長18㎜に成長し、トロピカルアイランドの稚魚水槽に展示しました。お客様から「小さい」「かわいい」などの声が聞かれ、人気者になっています。

（森　一行）

ネズミイルカを保護

2月12日に、鴨川沖の定置網に迷い込んだ、ネズミイルカ1頭を保護しました。ネズミイルカは、東北や北海道沿岸の冷たい海で生活する体長1.6mほどの小型のイルカで、まれに冬の南房総沖にやって来ることがあり、鴨川シーワールドでは今回が3例目の保護となりました。保護した個体は、体長163cm、体重55kgのメスで、屋外の施設で治療を開始し、3日目から自分でエサを食べるようになりました。1ヶ月後には1日8kgのエサを食べるようになり、体調も安定したことから、年間を通して水温17℃に保たれたマリンシアターに移動し、ベルーガと一緒に暮らし始めました。国内での飼育例が少ないネズミイルカを是非ご覧下さい。

（川﨑 遼平）

バンドウイルカの赤ちゃん誕生！

1月19日午後6時49分、バンドウイルカの赤ちゃんが誕生しました。通常、イルカ類の赤ちゃんは尾ビレから生まれてきます。しかし、今回は頭からの出産となり飼育係を心配させましたが、過去5回の出産経験をもつベテランお母さん「ノーマ」は無事に出産をはたし、赤ちゃんは元気よく泳ぎ始めました。赤ちゃんイルカは母親「ノーマ」や一緒に暮らしている仲間達に見守られ、すくすくと育っています。赤ちゃんイルカの愛称は一般公募で寄せられた5,000通以上の応募の中から、父親「レグルス」、母親「ノーマ」から1文字ずつもらい、女の子らしく可愛らしい響きの「ノエル」に決まりました。

（秋山 雅代）

親子でStudy
な・ぜ・な・ぜ・相・談・室

Q ベルーガはどこにすんでいるの？

Q とくちょうをおしえて！

Q ちょうのうりょくがあるってホント？

水の中は音が伝わりやすい
イルカは音をつかって
エサやものを見ることができるんだ。

マリンシアターでしょうかい
しているから見てネ！

表紙説明

「イルカの海」でジャンプする
バンドウイルカ（撮影：水口博也）